[研究論文]　未就学児を養育する母親の子育て観と影響因子

宍戸路佳[1]・久保恭子[1]・辻由紀[1]・坂口由紀子[2]・田崎知恵子[3]・及川裕子[4]

1　看護学部看護学科
2　日本医療科学大学
3　日本保健医療大学
4　群馬大学大学院博士課程

The mothers' views of raising a preschool children and the influential factors

Mika SHISHIDO[1], Kyoko KUBO[1], Yuki TSUJI[1], Yukiko SAKAGUCHI[2]
Chieko TAZAKI[3] , Yuko OIKAWA[4]

Abstract

The purpose of this study is to clarify the mother's views of raising a preschool children and the factors which influence them.

Questionnaire survey. SPSS ver.20 was used for analysis.

The data collected from 229 persons were used in analysis. There were 4 influential factors related to the mothers' views of raising children, which were: The 1st factor "the stresses from child rearing", the 2nd "Feeling anxiety on child rearing", the 3rd "Child rearing positive" and the 4th "Feeling of isolation in child rearing". The result showed a slight correlation among the degrees of satisfaction in the marital relationship, self-efficacy and the ages. Also, the full-time housewives are more likely to feel the "isolation in child rearing", according to the result. Therefore, enriching the quality of services at the child rearing salon, etc. is necessary for the better.

Key words: mothers, pre-school children, child rearing

1. はじめに

近年少子高齢化とともに核家族化が進んでいる。また厚生労働省の発表[1)]では、平成25年の子ども虐待相談件数も7万件を超え、年々上昇している。子ども虐待の半数以上が乳幼児であり、その中の4分の1は1歳の誕生日を迎えずに亡くなっている。乳幼児と乳幼児を持つ親への支援は重要であり、政府の政策においても子育て支援事業の普及、推進がかかげられ、今年度より子ども・子育て支援新制度の施行がされている[2)]。

しかし、これまでも子育て支援はされてきている。子育て支援に関する先行研究をみると子育て支援のあり方として、社会からの孤立感の解消、育児のしかたの学習の機会の提供を目的として開催されているものが多く、子育て支援参加者は、子どもが遊べた、リフレッシュできたなど満足している声もあるが、金銭的な負担がある、ニーズにあった支援がないや子育てサロンなどの情報が少ないなどの報告が散見されている[3)～5)]。

では、実際に乳幼児を養育している母親の困りごとや育児の状況はどのような環境でしているのだろうか。以前よりもスマートフォンやインターネット社会が進んでおり、親のおかれている状況も異なっていることが予測される。国も女性の社会進出を進めているが、総務省統計局[6)]のデータによると女性（15～64歳）の就業率は、2013年、平均62.4％で過去最高となり、有配偶者の就業率が大きく上昇したということであった。しかし、産後休暇のみ義務づけられているが、現実には、体調などを考慮すると休暇をとらざるをえず、リクルートジョブズの調査[7)]によると仕事をしている人は 40.7%、現在働いていないが働きたい人が51.1%、就業意向がない人は8.2%であったという報告もあり、自分自身の思い描いていた生活と現実の生活のギャップがあると子育てに影響を及ぼすことが予測される。また、母親が自分で虐待しているのではないかと感じている割合は、2子以降の母親、30歳未満の母親、就労していない母親が多くなっているという報告もある[8)]。

本研究の目的は未就学児を養育する母親の子育て観とその影響因子を明らかにし、今後の子育て支援、ひいては、子ども虐待予防施策への一助とする。

2. 研究方法

2.1. 対象者

地域の子育て支援講座や母親向けの教室、サロン等にかよう未就学児を養育中の母親を対象とした。

2.2. 調査方法

自記式質問紙調査。地域の子育て支援講座や母親向けの教室やイベントを主催している方に研究協力の依頼を行い、同意の得られたところで質問紙を配布した。データ収集期間は 2012 年 7 月～2014 年 3 月までである。

質問紙の内容は、諸井[9]の夫婦関係満足度尺度（6 項目、4 件法）、成田ら[10]の特性的自己効力感尺度（23 項目、5 件法）を使用した。また、対象の属性として、年齢、子どもの人数、子育て中で困っていること、相談者の有無、困ったときに利用するものなどと、子育て中の気持ちとして、荒牧[11]の育児感情尺度を参考に独自に 13 項目、5 件法で質問紙を作成した。

2.3 分析方法

分析には、SPSS ver.20 を使用した。独自に作成した質問項目の確認には、探索的因子分析を行った。その際、推定法は最尤法を用い,因子間に相関が仮定されるためプロマックス回転を用いた.因子数はスクリープロット基準により決定し、回転後の因子負荷量が 0.30 以上で構成された因子で構成した。その後、夫婦関係満足度、自己効力感、年齢との間での相関を、職業の有無と各因子間で t 検定(有意水準 $p < .05$)を行った。

2.4 倫理的配慮

地域で子育て支援講座を実施している団体や個人に協力を依頼し、参加している方へ説明文書及び口頭で質問紙への回答は自由であること、答えなくても不利益はないことなどを説明し、質問紙及び返信用封筒を配布した。なお、このアンケートを実施にあたっては、研究者の所属していた横浜創英大学の倫理審査を受けている。(承認番号：010 号)

3. 結果

3.1 対象者の概要

地域の子育て支援講座に参加している母親を対象に研究に同意をした（返信のあった）246 名のうち、末子の子どもの年齢が未就学児であるものを対象とし、空欄の多かった質問紙を除く 229 名を分析対象とした。なお、この地域の子育て支援講座は、原則無料で参加できるものである。

対象者の年齢は、20 歳～48 歳で平均 34.54(±4.69)歳、有職者(パート・アルバイト含む)77 名(内、46 名は産前産後休暇中もしくは育児休暇中)、専業主婦 149 名、学生 2 名であった。核家族 207 名、拡大家族 22 名であった。また子どもの人数は、平均 1.54(±0.69)人で、1 人 128 名、2 人 80 名、3 人 19 名、4 人 2 名であった。

3.2. 母親の子育て観の因子分析

子育てをしているときの気持ちを 13 項目で聞き、因子分析の結果に示す。以下、調査項目を「　」で記し、因子を【　】で示す。

第Ⅰ因子が「言うことを聞かないのでイライラする」、「子どもが汚したりするのでいやである」「子どもがかわいくない」の 3 項目の【育児ストレス】、第Ⅱ因子が「他の子が出来て自分の子が出来ないことが多い」「自分の子の発達が遅れているのではないかと感じる」「育児をどうしたらよいかわからなくなる」からなる【育児不安】、第Ⅲ因子が「子育ては有意義ですばらしい」「子育ては楽しい」など 4 項目からなる【子育てポジティブ】、第Ⅳ因子が「自分ひとりで子育てをしている感じがする」、「子育てばかりで社会から孤立していると感じる」など 3 項目からなる【子育て孤立感】であった。

表 1　子育てをしているときの気持ち

	因子			
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
1-9 子どもが言うことを聞かずイライラする	**.874**	.010	-.023	-.211
1-6 子どもが汚したり散らかすのでイヤである	**.786**	.010	.120	-.009
1-7 子どもがかわいくない	**.560**	-.026	-.132	.109
1-11 他の子が出来て自分の子が出来ないことが多い	.033	**.912**	.035	-.014
1-12　自分の子の発達が遅れているのではないかと感じる	-.026	**.759**	-.079	-.005
1-10　育児をどうしたらよいかわからなくなる	.235	**.309**	-.145	.185
1-2　子育ては有意義ですばらしい	-.096	-.051	**.691**	.051
1-1　子育ては楽しい	-.090	.208	**.681**	-.124
1-4　子育てにより自分の成長も感じる	.176	-.141	**.573**	-.007
1-3　子どもの成長は楽しみである	.041	-.066	**.402**	.092
1-13　自分ひとりでこそだてをしている感じがする	-.117	.043	.033	**.691**
1-8　子育てばかりで社会から孤立していると感じる	-.074	-.048	-.057	**.534**
1-5　子育てのために我慢ばかりしている	.365	.010	.174	**.444**
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ	-	.510	-.454	.540
Ⅱ	-	-	-.356	.418
Ⅲ	-	-	-	-.333
Ⅳ	-	-	-	-

因子抽出法: 最尤法
回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

3.3. 母親の自己効力感・夫婦関係満足度尺度の得点と子育て観との関連

母親の自己効力感は、平均 72.92（±11.05）で、夫婦関係満足度は、平均 19.05（±3.95）であった。

自己効力感と子育て観因子である【育児ストレス】（r＝-.222　p<.01）【育児不安】（r＝-.227　p<.01）【子育て孤立感】（r＝-.224　p<.01）と負の弱い相関、【子育てポジティブ】（r＝.320　p<.01）で正の弱い相関が見られた。

夫婦関係満足度では【育児不安】（r＝-.304 p<.01）【子育て孤立感】（r＝-.300　p<.01）で負の弱い相関、【子育てポジティブ】（r＝.246　p<.01）で正の弱い相関がみられた。母親の年齢との間でも【育児ストレス】（r=.201 p<.01）との間で正の弱い相関があった（表 2）。専業主婦と有職者（産前産後休暇中もしくは育児休暇中を除く）でわけ職業の有無と各因子の下位尺度得点の平均の差について検討した結果、【子育て孤立感】との間でｐ＜.001 となり有意差がみられた（表 3）。

表２．子育て中の気持ちの因子と各項目との相関　　n＝229

	年齢	自己効力感	夫婦関係満足度	育児ストレス	育児不安	子育てポジティブ	子育て孤立感
年齢	-	.147*	-.168*	**.201****	.071	-.081	-.017
自己効力感		-	.188**	**-.222****	**-.227****	**.320****	**-.244****
夫婦関係満足度			-	-.189**	**-.304****	**.246****	**-.300****
育児ストレス				-	.499**	-.364**	.366**
育児不安					-	-.373**	.372**
子育てポジティブ						-	-.223**
子育て孤立感							-

*. P<.05　**. P<.01

表３．職業の有無と各因子との差

		度数	平均値	標準偏差	
育児ストレス	専業主婦	149	8.86	2.70	
	有職者	33	9.12	2.63	
育児不安	専業主婦	149	7.40	2.65	
	有職者	33	7.45	2.14	
子育てポジティブ	専業主婦	149	18.30	1.78	
	有職者	33	18.42	1.84	
子育て孤立感	専業主婦	149	8.64	2.58	***
	有職者	33	7.18	2.46	

***p＜.001

3.4. 母親が抱く子育てについて困っていること

自由記述を類似した内容でまとめた。表４に示す。育児をする中で困っていることは、食事、睡眠についてが多く見られた。

また、相談できる人はいるかでは、227 名（99.1%）が相談できる人はいると答え、2 名（0.9%）が相談できる人はいないと答えていた。最も多い相談する人として、夫が 90 名（39.3%）、実母 54 名（13.5%）、友人 31 名（13.5%）、きょうだい 14 名（6.1%）実父、義母が各々3 名（1.3%）であった。その他困ったときに利用するものとして、インターネットを 189 名（82.5%）が利用しており、雑誌・育児書 117 名（39.8%）、電話相談 49 名（21.4%）、保健センター・子育てサロンなどの地域の施設 20 名（8.7%）、医師・助産師などの医療職 15 名（6.6%）、市の育児相談 5 名（2.2%）、保育士 3 名（1.3%）、講演会への参加 3 名（1.3%）、テレビ 2 名（0.9%）、利用したことなし 19 名（8.3%）であった。上記のものを利用するときはどんなときかという質問では病気・ケガが不安なときが最も多く、次いで子どもの発達状況などがあげられていた（図 1）。これをインターネットのみを利用すると答えた 56 名のみに限定して、困ったときとはどんなときかをみても、24 名が病気・ケガのときと答え、6 名が子育てで不安・困ったときやちょっと調べたいとき、5 名が夜泣きという結果であった。インターネットのうち、どのようなものを閲覧したり参考にするのかでは、病院のサイトを利用しているものは、71 名（38.0%）、Ｑ＆Ａなど質問できるサイトをみたり実際に質問するという人は 119 名（63.3%）、ＳＮＳを利用するというものが 31 名（16.5%）であった。

表4.　育児をする中で困っていること

		困っている内容	度数
食事について	50	偏食・食事をたべない	39
		母乳・卒乳について	9
		食物アレルギー	2
排泄について	2	トイレットトレーニング	1
		便秘	1
睡眠について	45	夜泣き	37
		なかなか寝ない	8
成長・発達について	11	言葉や成長の遅れ	4
		泣き止まない	4
		人見知り	1
		かんしゃく・ぐずり	2
子育てについて	35	イヤイヤ期の対応	15
		きょうだいや友達とのけんかの対応	5
		言うことをきかない	5
		しつけの方法	3
		乱暴でこまる	2
		きょうだい間での親の接し方	2
		子どもと接する時間がとれない	2
		片付けをしない	1
家族との関係性	7	夫が育児をしない	2
		親や夫との育児方針の違い	2
		親との関係	2
		親との同居	1
自分自身のあり方	11	仕事、育児、家事の両立	5
		イライラしてしまう	5
		朝起きれない	1
子どもが病気のとき			3
何かあったときに預ける人がいない			4
全て			1
特になし			12

4. 考察

子育て観と夫婦関係、自己効力感は関連があり、これは先行研究を支持する結果であった[4)、5)、12)]。本調査で新たにわかった知見として、母親の年齢が高くなるほど【育児ストレス】を感じやすく、専業主婦は【子育て孤立感】を感じやすいという結果であった。先行研究の多くは、若い母親が育児に不慣れであり、育児ストレスが高いと報告されているが、本研究では逆の結果であった。年齢が高くなれば、それだけ社会的地位があり、働いていたことも予測され、子育てによるキャリアの中断や子育ては仕事と違い、母親が段取りをつけて子育てに臨んでも、親が思うような育児方法ができないことも多く、ストレスが高くなることが推察できる。また、専業主婦は外出する場所がなければ社会と断絶されてしまい孤独感を感じやすいと考えられる。今後、育児サロン等においては若年母のみならず、高齢出産の母親への支援も考慮していく必要がある。

今回の調査は、子育ての相談者がいないと答えた方が2名いた。孤立感は親のメンタルヘルスに影響し、親の不安定な精神健康状態は虐待に発展する恐れがある[13)]。子育てサロンが、他の親と気軽に話せる関係性づくりや情報交換の場としての役割が一層求められている。また、親の困りごとが子供の食事や睡眠であることが多く、今後、サロンにおいても離乳食やお昼寝等の情報提供を計画したい。

インターネット社会となっている現代、内閣府[14)]の調査によると携帯電話の普及率は 94.4%、パソコンの普及率も 78.0%となっており、ほとんどの方が利用している状況にある。インターネットはすぐに検索ができ、育児の情報も満載されているが、インターネットの情報の中には正しいものとそうでないものがあり、子どもの病気やケガ等の緊急を要するときの使用は慎重になりたいものである。また、親は子どもの病気の診断等でインターネットを使うことがあるが、病気の種類は多々あり、子どもの状況により症状の出現の仕方も様々である。このようなことをインターネットの情報から判断することはとても難しく、重篤の場合には手遅れになることもある。しかし、少子化とは対照的に小児医療の現状として、小児科医の不足、急性期の集中治療・専門的医療を担う体制の整備が求められ

ている[15]が、現実には病院を気軽に受診したり、相談できる環境にないことが予測できる。また小児救急電話相談事業も展開されているが、電話相談をしている人も少なく周知されていない可能性も推察できる。今後、かかりつけ医の存在や地域の母子保健推進委員などの活用を視野に入れて、子育ての専門職者が地域の人々の身近な存在となるとともに、正しい情報の提供などを発信していく必要があると考える。

文献

1）厚生労働省：児童相談所での児童虐待相談対応件数, http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000053235.pdf ,(最終閲覧日；平成２７年９月２９日).

2）内閣府・文部科学省・厚生労働省 :みんなが子育てしやすい国へ すくすくジャパン, http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/event/publicity/pdf/naruhodo_book_2609/print-a3.pdf, (2014)（最終閲覧日平成 27 年 9 月 29 日）.

3）森礼子,後閑容子:地域主催の子育て支援事業の分析 地域の子育て教室からみる行政保健師の役割,保健師ジャーール,68(9),800-807,(2012)

4）中山和美，山崎由美子，石原昌他:母親たちが望む育児支援情報提供のあり方,母性衛生,48（4）,471-478,(2008).

5）大住裕子，野田茉里奈，奥野未奈他:０～３歳の子を持つ母親の子育て支援への満足感と求める支援,香川母性衛生学会誌,11（1）,50～57,(2011).

6）総務省統計局:女性の就業率上昇 -M字カーブの変化- http://www.stat.go.jp/data/roudou/tsushin/pdf/no11.pdf ,（2014）（最終閲覧日平成 27 年 9 月 29 日）.

7）リクルートジョブズ:-主婦の就業に関する 1 万人調査 -20～49 歳の既婚・子供あり女性の就業状況, http://jbrc.recruitjobs.co.jp/data/pdf/pdf201410281300.pdf ,（2014）（最終閲覧日平成 27 年 9 月 29 日）.

8）井上みゆき，篠原亮次，鈴木孝太他:母親の主観的虐待感と個人的要因および市区町村の対策との関連－健やか親子 21 の調査から－,小児保健研究,73（6）,818-825 2014.

9）諸井克英:家庭内労働の分担における衡平性の知覚, 家族心理学研究,10（1）,15-30,(1996).

10）成田健一，下仲順子,中里克治他：特性的自己効力感尺度の検討 ,生涯発達的利用の可能性を探る,教育心理学研究 ,43(3), 306-314,(1995).

11）荒牧美佐子:幼稚園への入園前後における母親の育児感情の変化家庭教育研究所紀要（30），139-149,（2008).

12）岩渕祥子,奥澤聡子,神川洋平他:母親の育児負担感への寄与因子の検討に関する研究，信州医学雑誌,57（5）155-161,(2009).

13）久保恭子,後藤恭一,宍戸路佳他:新潟中越地震災害が夫婦関係やストレス、子どものメンタルヘルスに与える影響,小児保健研究,72（6）,804-809,(2013).

14）平成 27 年 3 月実施調査結果：消費者動向調査 http://www.esri.cao.go.jp/jp/stat/shouhi/2015/201503shouhi.html,（最終閲覧日 9 月 28 日）.

15）地域医療計画実践コミュニティー（RH-PAC）:地域医療ビジョン/地域医療計画ガイドライン,小児医療 289-298, http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/HPU/seminar/2014-10-12/d/Guideline_F21.pdf ,（最終閲覧日 9 月 28 日）.